

ダンスの変遷史 (一)

表題について、明治以降のわが国の教育の場を中心に述べさせていただきます。

一、唱歌遊戯のはじまり

明治初期、ダンスは遊戯ということばで呼ばれていたというより、その範疇に入るものであった。その中で唱歌遊戯と称したものが今日のダンスの一つの基礎を成すものであった。この唱歌遊戯は、明治七年、伊沢修二によつてはじめられた。

戸倉⁽¹⁾ハル先生によれば、『愛知師範学校長、伊沢修二は、フレールの書に、

『歌うことに動作をつけて行なわせることは、子どももの活動性を増すことである。』

輿水^{こしみず}はる海^み

という一文を見出し、これを附属下等小学校に研究させた結果、大いにその効果が認められたので、時の文部省に次の様な建議文を提出した。

『唱歌ハ精神ニ快樂ヲ与ヘ運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ、此二者ハ教育上、並ビ行ハレテ偏愛スベカラザルモノトス、而シテ運動ニ數種アリ、方今体操ヲ以テ、一般必行ノモノト定ム。

然レドモ、年齢幼若、筋骨軟柔ノ幼生ヲ激動セシムルハ、其害却ッテ少年カラズト、是レ有名諸家ノ説ナリ、故ニ今下等小学ノ教科ニ遊戯ヲ設ク。』

この一文が、田中不二麻呂文部卿によつてとりあげられ、東京女子師範学校附属幼稚園は、その調査方を命じられた。そして、豊田英雄女史が幼稚園にあつてこれを研究した。」

と述べているが、当時の保母、豊田英雄、近藤ハマ等が、桑田親吾訳「幼稚園」、関信三訳「幼稚園記」等によって、(原著も参考にしたと思われる) 研究を重ね、実際指導に当った。

しかし、それらの直訳ではなく、意のあるところを汲んで、子どもたちに適応するように歌詞をつくり動作を考えた。音楽は、式部寮雅楽課の伶人によって作曲された。

豊田英雄は「保育の葉」の五、開誘の方法の中で、「保母は種々新案を以て遊戯に充つる歌詞所作をも工夫し、古きに換へしむる意匠あるべし」と述べ、例として、家鳩、民草、水車、猫鼠、盲ひ、環木、蝶々、此門、兄弟、姉妹、風車をあげている。この中から民草をとりあげてみよう。

幼童遊戯伎譜⁽⁴⁾

民草

初段 播種ノ形状ヲナス

群児手ヲ携テ輪ヲ作り其長者初句ヲ発声ス第二句ヨリ群児一斉ニ謳ヒテ第二句ヨリ手ヲ放チ右ニ向手ヲ左右ニ振り左足ヨリ歩行シ歌ノ止ム迄旋止ス立止テ手ヲ携フ

二段 植田ノ形状ヲナス

(以下、動作を省く)

三段 刈獲の形状ヲナス

四段 獲稲ヲ運搬ノ形状ヲナス

五段 稲コキノ形状ヲナス

六段 稲ウチノ形状ヲナス

七段 終業就眠の形状ヲナス

八段 秋成ヲ賀シ謳テ

「幼稚園」巻下の第十六「農夫ノ歌」、
「農夫」を参考にしているが、この両者の内容は類似しているの
で、前者と民草を対比してみる。

農夫の歌 (大意をまとめたもの)

其一 大麦小麦ヲ撒ク如何

其二 大麦小麦ヲ蒔ル如何

其三 大麦小麦ヲ扱フ如何

其四 大麦小麦ヲ篩フ如何

其五 農夫ノ業ヲ終ルトキ休ム如何

其六 農夫ノ業ヲ終ルトキ其遊フ如何

農夫の歌が麦を扱っているのを、民草では、わが国の農業の根

幹となつてゐる稲におきかえ、八段に増やすなど、苦心のあとが窺われるが、同時にその創造性の豊かさに驚く。歌詞八段は豊田英雄の作になるもので、曲は伶人東儀秀芳であり、明治十一年六月十七日に上申された。

昭和四十四年、第六回国際女子体育会議が東京で開催され、松本千代栄教授によつて「日本における学校ダンスの歩み」がレクチュア・デモンストレーションの形式で発表された。教育大附属小学校五年生によるグループ表現は、参会者に多くの感銘を与えた。その一つに「稲の一生」があった。動作は活動的で創造性を遺憾無く發揮していたが、その構成は正に、民草の現代版である。

民草等の遊戯の扱い方について、豊田英雄は「児童の遊びに娯むやの模様を見計らふの事緊要なりとす」と述べてゐるが、今日も、十分に通用することばである。

二、鹿鳴館と舞踏会の手帖

欧化主義の代表的なものの一つとして、明治十六年十一月、不平等条約改正の願いをこめて、鹿鳴館が建設された。鹿鳴館は内外人の社交の中心となり、上流社会の紳士淑女達によつて舞踏会が開催された。

この鹿鳴館では、どの様なダンスが踊られたのであろうか。この疑問を解いてくれたのは、江藤淳氏が遠くドイツのキール市立図書館附属のシュタイン文書館において発見した「舞踏会の手帖」である。江藤氏によると、「シュタインの長子、エルンスト・フォン・シュタインが、老齡の父親の名代として来日した際、記念に持ち返つた……」中の一つにこの舞踏会の手帖があった。

PROGRAMME	ENGAGEMENTS
1. POLONAISE	1.
2. QUADRILLE	2.
3. VALSE	3.
4. LANCERS	4.
5. POLKA	5.
6. CALEDONIANS	6.
REFRESHMENTS	
7. VALSE	7.
8. QUADRILLE	8.
9. MAZURKA	9.
10. LANCERS	10.
11. VALSE	11.
12. GALOP	12.

このプログラムは明治二十年十一月三日、天長節の夜のものと、小さい鉛筆が付いており、左側はプログラム、右側はパート

ナーの名まえを記入する様になっていた。当夜のダンスは、ポロネーズ、カドリール、ワルツ、ポルカ、カレドニヤンス、マズルカ、ランサース、ギャロップであった。

鹿鳴館の影響は直ちに学校教育にも現れた。東京女子師範学校、秋田師範学校、愛知師範学校では、生徒の服装を着物から洋服にした。東京女子師範学校では、時々、外国人ヤンソンを招いてダンスの練習を行なったり、講堂で舞踏会が開かれた。中川謙二郎は、当時を回想して、「恰度私の室の隣りの室が、舞踏を稽古する教場になって居たので、騒々しくって困った。私はダンスが嫌ひでしたから、もう少し静かにしてくれぬかといふと、静にしては稽古は出来ませんと言つて居つた。恰度大きな講堂があつて、舞踏室によかつたと見えて、大学の教授連がよく来てダンスをやつて居つた。坪井玄道君なども体育の方からダンスを研究すると云つて来て居たが、大学の方では穂積陳重、桜井鏡二博士等がよく見える顔だつた。」と書いている。

また、後閑菊野は当時の急激な変化の姿を次の様に述べている。「然るにこの頃から世の中の有様は、だんだん變つて参りまして、所謂鹿鳴館時代となり万事西洋風を尚び、舞踏会などが処処で開かれるようになりましたから、学校に於いても時々そのおやどをなさいましたので御座いませう、講堂に朝野の紳士淑女が

お集りになつて、舞踏をなさいました。私は卒業して未だ間もない時でありましたが、附属小学に勤めさせて頂いておりましたから、校長はじめ他の職員の方々と御一緒に此会に出席致しました。……束髪に薔薇の花をさしたり、洋服を新調したり、帽子の飾りに骨を折つたり、苦心致したので御座います。そうして出来上がりしました其様子の可笑しさは、皆様の御想像にまかせます。」しかし、鹿鳴館時代は永くは続かなかつた。明治二十二年には帝國憲法が、二十三年には教育勅語が發布され、社会は急転して国家主義の方向へ向つて行つた。女学生の洋服姿はまた元の着物姿に戻つてしまつた。

この鹿鳴館のダンスは学校教育にも影響した。明治二十年頃の東京高等女学校（後の東京女子高等師範学校附属高等女学校）では、「あとでダンスを教えるから、まず徒手体操だけはしなければいけませんよ」と、当時流行のダンスにことかけて、ごきげんをとりむすび、体操にご出席をねがつたとある様に、ダンスを授業の中に取り入れた。鹿鳴館時代が去つても、これらのダンスは女学校にひろがつていったと考えられる。例えば、明治二十七年十一月に開催された華族女学（後の女子学習院）の第一回運動会では、ポロネーズ、方形行進が行なわれているし、三十年代以後の全国の小学校高学年や、女学校のダンスの中心教材は、カドリ

ール、カレドニヤンス、コチロン、ランサーズであったことによつても、おしはかることができよう。

三、遊戯時代の到来

明治三十年代になると、体育の授業の中心教材であった普通体操は形式化して人々の関心を失いつつあった。その頃、欧米の遊戯事情が坪井玄道、白井規矩郎らによつて紹介されると、遊戯研究熱は急激に高まり、同時に、日本遊戯調査会をはじめとする遊戯研究グループが誕生した。そして、大村芳樹、高橋忠次郎等により、「実験的」「最新」「教育的」等を冠した遊戯書が相次いで出版された。一方、川瀬元九郎や井口あくりによつてスエーデン体操が移入され、普通体操か遊戯かスエーデン体操かで体育界に混乱を招いた。そこで、明治三十七年文部省は「体育遊戯取調委員会」を設置した。委員会は翌三十八年十一月三十日の報告書¹²⁾で、学校ニ於て奨励スヘキ遊戯として、

競争遊戯 (例) 綱引、毬送、フットボール、鬼遊ノ類

行進遊戯 (例) 十字行進、踵趾行進、方舞ノ類

動作遊戯 (例) 桃太郎、池ノ鯉ノ類

が挙げられている。

行進運動ハ、主ニ女子又は幼年生に適スルモノニシテ、規律及

び協同ヲ尚ビ、調和及び優美等の審美的情緒ヲ養ヒ、且ツ又身体ノ端正ト举止ノ閑雅トニ慣レシムルヲ要旨トス。尚又此ノ遊戯ノ特長ハ、脚部ノ運動ニアルヲ以テ、膝坐ノ習慣アルモノニ取リテハ、最良ノ運動法ナリ。

十字行進、踵趾行進、及び方舞ノ類、何レモ此ノ意義ニ於テ課セザルベカラズ。

動作遊戯ハ、主ニ幼年生に適シタルモノニシテ、其ノ目的殆ンド行進運動ニ同ジトス。

と述べて、女子と幼年生に適するものとし、その目的を審美的情緒を養い、端正なる身体とたちいふるまいのみやびやかさに置いている。また、これらの動作が脚部の運動を中心に行っていることがこの時代の特徴であり、胴体の動きが重視されるのは、一部を除き、ずっと後のことである。

四、運動会のダンス

平素の体育の成果を発表して、体育の必要性を説く目的を持つて、運動会が全国的に開催された。(明治二十年代には遊戯会と称した。)この運動会の演技種目の中でダンスは、唱歌遊戯、行進遊戯と呼ばれて、観衆の関心をひいた。

楽しみの少い当時にあって、演ずる者と観客とが一体になって

いた。年に一度の待ちに待った日、軍楽隊がふん囲気を盛りあげ
る中で、優雅に袂をひるがえしてカドリールが踊られた。「坪内
逍遙博士がダンスの仲間に入られ、我々が足をひいて礼を示す時
に帽をぬがれた姿が今も目にあります」と明治四十年頃を、佐藤
はる女は回想している。これほどに当時の運動会の中で、ダンス
は楽しく、「運動会の華」であった。そして、観衆の女性美の概
念を、かつての静的なものから、動的な美、つまり健康美へと導
いていった。反面、練習のために費す時間、見せる要素の強調、
経費等に問題を残した。

日本女子大学校（後の日本女子大学）の運動会のプログラム
は、白井規矩郎、平野はま子等の指導による、デルサルト式、表
情体操などダンス中心に組まれ、東都にきこえた運動会であっ
た。数多くの新聞雑誌評には「詩的にして、高雅なる、艶麗にし
て優美なる、巧妙なる、悲劇的、瀟洒で高潔、壮快淋漓、高尚、
詩化し、都雅」などの語が見られ、「感情表現」をはかった点と、
花、布等によって空間構成を考えた点に特色が見られる。

わが国の学校の運動会におけるダンスは、重要な位置を占めて
おり、これが学校体育の中でのダンスを確乎たらしめ、方法的に
は幾多の変遷を遂げながらも、今日に至ったと考える。また、運
動会とダンスの結びつきが、永い体育の歩みの中で、「ダンス講

習会」を成立発展させた大きな要因であると考えられる。(つづく)

(お茶の水女子大学)

註

- (1) 戸倉ハル「ダンスと教育」『子供と女子の体育』日本女子体育連盟一九六〇年四月号、83頁―85頁
- (2) 桑田親吾訳『幼稚園』文部省・明治九年一月
- (3) 関信三訳『幼稚園記』東京女子師範学校明治九年七月
- (4) 愛珠幼稚園『遊戯体操』明治十七年七月
- (5) 外山友子「幼稚園事始」『東洋音楽研究』第43号昭和五十三年七月、42頁
- (6) 芝祐泰編『保育唱歌五線譜』巻一、昭和三十一年十月十六日
- (7) 江藤淳『明治の群像』新潮社、昭和五十一年、98頁―100頁
- (8) 毎日新聞社『一億人の昭和史』一九七七年五月、70頁―71頁
- (9) 中川謙二郎『明治初年の女子教育』『教育五十年史』大正十一年、76頁
- (10) 桜蔭会「生徒の風俗」『桜蔭会史』昭和十五年、27頁―28頁
- (11) 作楽会「あの人もここに学んだ」『作楽会史』昭和三十七年十二月、11頁
- (12) 井口阿くり外「乙運動遊戯ノ實際」国光社、明治三十九年七月、347頁―353頁
- (13) Koshimizu, Harumi, Wake, Chieko. "UNDOKAI (THE ATHLETIC MEETING) OF WOMEN'S HIGH SCHOOL IN THE MEIJI ERA." International Seminar of Physical Education and Sports History, 1978.